

プロムンの新作を買おうとしたら都市にいた

外郭在住DM

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

都市に行ってみたらどうなるかなっていう妄想

本編を壊さないようにのんびり都市で過ごしてもらおうかなと思ってます。

L o b b o t o m y C o r p o r a t i o n

L i b r a r y o f R u i n a

ねじれ探偵

以上の二次です。

事前知識があるといいかなくなって思うけど、作者は雑なにわかなので知らない設定は余裕でオリジナル設定にします。妄想に付き合うか、おかしいやろ！と突っ込んでくださ

い

見切り発車をしてしまったり色々困ったので、書き直し予定です。

一応しばらくは残して置く予定です。

11/12追記：書き直し始めました。別の小説としてあげていますので、これからおろしくお願いします

目次

プロローグ

新手のフィッシング詐欺に会った

1

超武闘派事務所でした、どうしましたよ

う

———
12

こんにちは、管理人
———
29

自分を消していく、そうですか

43

プロローグ

新手的フィッシング詐欺に会った

とある実況者のゲームプレイを眺めていた。

アブノーマリテイという変な奴を管理するというゲーム。

ロボトミーコーポレーション。

まあ、愛と憎しみの名のもとに職員を処刑しまくったり、職員をふざけて殺したり、やべえ奴らと戦う職員を高見の見物したり、僕の考えた最強の職員を殺人性のパニツクにしたり。

もちろん職員で遊ぶだけではない。このゲームの魅力はそれだけではない。

ウサギさんと草を食べたり、オーケストラを聞いて楽しんだり、

気付けばハゲになったり、ビナーという素敵お姉さんとのお話で癒されたりすることもできる。

動画をきっかけにロボトミーコーポレーションをプレイした人も少なくないと思う。

現に自分もそうだったし。とりあえず完全エンドまでやらせていただききました。

攻略を見ないでプレイするのは本当に大変だった。

動画も途中までしか見てないからALEPHとかは完全に手探りだったし……。
とりあえず楽しかった（小並）

「終末装備、かつこよすぎるだろ……」

その強さと、禍々しい感じにほれ込んだ。全属性つて良い。

審判鳥の装備もなかなか厨二感溢れる見た目で好きだ。

きつと皆もわかるはずだろう。まあ、それぞれの推しがあるとは思うが。

とにかく、その魅力を伝えるのは難しい。

とりあえず面白かったですとレビューを添えておこう。

あと、ビナー語専攻はどこで受けられますか？

とも書いておかないと。

さて、話は逸れたが。そんなこんなで楽しんでいたら、なんと新作があったという。

とりあえずサイトを開いて、お、あったあった。

ライブラリーオブルイナ。新作は全く違うゲームシステムらしいけど。

まあ、あれの続編がつまらないわけないだろ。

よし、それじゃ購入、と。購入ボタンをクリックするも、なかなか反応が返ってこない。
い。

何度もクリックする。

「ん？リロードでもするか」

「ピシ、とパソコンの画面にヒビが入る。

突然の不思議な出来事に、マウスから手が離れる。

ハアアアア……

謎の現象に戸惑い、とりあえず立とうとした矢先、何か声が聞こえた気がした。

と、同時に、強い頭痛がする。それに、地震のように体が揺れている感覚。

バランスをとることができず椅子から転げ落ち、床に倒れこむ。

チイイ………ジイイイ………

何かが叫ぶような声が聞こえた気がしたが、もう何を言っているのかわからない。

手を動かすと、ぬるりとした感覚。視界が赤くなつて、もはや痛みもない。

意識が途切れそうになる。

耳鳴りがひどい。

ハアアアアアアアアアアアアアアアア……！！

意識が保てない。

気付けば、赤い部屋で立ち尽くしていた。

どこだ、ここ………

周りが青基調になっていているのが覗ける部屋だが、赤黒く染まっている。目立つ山がある。よく目をこらせばそれは人が血まみれになって積まれてできたもの。

一瞬、吐き気を催すが、すぐにおさまる。

動く様子もない。死んでいるのは間違いない。とはいえ。

「気持ち悪い……」

そして次にわかるのが、自分の声がなんだか変だということ。

手を喉に当てて、愕然とする。

固い感触？

「は？」

自分の手を見ると、全く人間のそれとは異なるものだった。

鉱石のようなもので出来ている手は、人間とは違う。体全身も同じようなもので出来ている。

それに、血まみれだ。

全く理解が及ばないので、とりあえず椅子に座る。

血まみれの椅子に顔を……あるかはわからないが、しかめつつも、座る。

というより、人が死んでるよな。誰も生きていない。そしてなぜか俺だけが生きてい

る。

いや、なんとというか人間ではないものになってしまったみたいだから、生きているのかはよくわからないけど。

扉があるし、移動してみるか。

……この手だと、開けづらいな。なんとというか、人間の手ならいいのに。そう思っていると、くらりと意識が途切れる。

あなたは誰？

その問いかけがどこからか聞こえる。

ただの凡人だと答えると、

次に帰ってきたのは呻き声と、わからない、思い出せない、という呟き。

どうしたのか、と尋ねる。

私が誰なのかわからない。知らない？

その質問の答えは持ち合わせていない。

私の中にいるのに、どうして？

深い悲しみと、怒りが混じった鉾石の塊がこちらの体に突き刺さる。

何かが流れ込んでくる気がしたが、よくわからない。

受け入れて

何を受け入れろというのか。知らない人のものを？

……。

もう返事はない。

次に目覚めると、自分の手が人間のものになっていた。

手を握ったり開いたりする。よし、だいじよう。……。

次の瞬間、鼻を突く異臭に俺は吐き出していた。

「お、ええっ」

しばらく吐いて、吐き続ける。

気持ち悪い。椅子に座る。

鉄臭さや腐臭がまじりあったそれは、ただの一般人にすぎない俺には、到底耐えられるものではなく。

「で、よう……」

なんとか扉を開き、向かい側に移動して、扉にもたれかかり、そのまま崩れ落ちる。

「はあ……はあ……」

扉は匂いを遮断しているようで、こちらまで匂いはそこまで来ていない。

まあ、臭いは臭いが。

しばらくして、少し冷静になったところで周囲を見回す。

その時、扉に反射した顔が自分のものではないことに気付く。

「誰だこれ……っっていうか、女？」

胸を触ると、一応胸は多少ある。

どうやら、なぜかはわからないが女になってしまったらしい。

それに、ここはどこなんだろうか。

天井のマークを見る。ギザギザの矢印、それを貫く直線の矢印。

「見覚えはないな」

というか、これってもしかして転生ってやつなのか？

とりあえず、向こうにも扉があるし、進むしかないのか。

扉を開けると、一人の男がいた。

どうやら寝ているようで、椅子に座ったまま目を閉じている。

血まみれのなかでよく眠れるな。ひどい匂いだ。

とはいえ、慣れてきてもう吐くほどではない。

「あなたは」

声をかけようとすると、彼は目を開く。

「お前は……化け物女か」

彼は背中 of 剣を抜く。どう見てもこちらに向いているようにしか見えない。

「はっ？」

一歩下がる。

「死ね」

何がですか？とか、ねじれたってなんなんだ、とか何を聞こうかという考えは、ぼと、という音と共に途切れる。

あ、と声漏れる。右腕が無くなっていた。

次にはもうかがみこむ。痛い。熱い。

声があふれる。そうしないとこの痛みが。

あああああああああああああ！

叫んで、この元凶を見上げる。

次にはもう、俺は視界に入る剣を見ることしかできなかった。

呆然としている。

ざわざわとした会話が聞こえ、周りを見ると死んでいたはずの人が生きている。なんなんだよ、いったい……

呆然としていると、次々と人が出ていく。

「つきましたよ」

隣の人が呆然としている俺に対して声をかける。

「あ、ああ」

そう声を出す。この人も山の中にいたはずの。

訳が分からない。とにかく、出よう。外の空気が吸いたい。

広がる景色は、とにかく灰色。

そうとしか言えない。

灰色の空。灰色の建物たち。

色とりどりに光る看板だけが、己が灰色ではないのだと主張する。

いつのまにか背中に背負っていた剣。

周りの人も、何らかの武器を持っているようだ。

なんというか、やばい世界に来てしまったのかもしれない。

とりあえず、どうするか。

お腹がすいている気がする。

見れば、行列の出来ている店がある。

「ハムハムパンパン……」

どうやらサンドイッチを売っている店らしい。

周りの人達が美味そうに食べている様子や行列を見るに相当美味しいのだろう。「からし味でお願いします!」

元氣そうな金髪の子。

今の自分よりも背が高い。

そしてその横にいる女の人は、つてこつちを見ている。

「……どうかしたんですか?」

問いかけると、その人はこちらから視線を逸らす。

「……いや、なんでもないよ」

「モーゼス探偵さんはどうしますか?」

「ああ、適当に頼む」

探偵さんと呼ばれている。ならばきつとここの情報にも詳しいだろう。

「探偵なんですか?」

「そうだな、一応は」

「なら、少しお話いいですか?」

「まあ、かまわない」

とりあえず、情報を集めないといけないな。

そうしてこの世界を生きていくんだ。

殺されるのは嫌だ。

アレが夢なのかはわからないけど、あんなに痛い思いはしたくない。

あの男は殺すのにためらいがなかった。あの血まみれの状態が普通なんだ。

人が死ぬが普通の世界、どうにかして生き延びないといけないから。

俺はとにかく守ってもらわないといけない。

そのためにもまずこの人を頼ってやる。

超武闘派事務所でした、どうしましょう

「記憶がないんですか!？」

彼女は驚いたようにこちらを見る。

「というか、話を聞く限り、どうやって記憶を失って生き延びているのか、という驚きもあるのだろう。」

「目覚めたのがついさっきで」

「なにか覚えていることとかはないのか?どこからきたのかとか」

「多分。俺は少なくともこの都市を知らない」

なんとなく思い浮かぶことはある。

ロボトミーコーポレーションで少しささやかれていたが、よくは知らない。

「そうか……話が長くなりそうだ。何か飲み物を用意しよう。手伝え、エズラ」

探偵さんと呼ばれた人の名前はモーゼスというらしい。そして金髪の方の人はエズラ。

二人に案内されてきた建物。三階建ての建物だ。どうやら彼女たちの事務所のようなものらしい。

そこで話をすることになり。そしてそのうちに俺は記憶がないことになった。

聞けばここは14区。全部で20区以上もある中の一つ。そして彼女たちはフィクサーという職業なのだそう。

聞いたところだと内容は便利屋。そういえばロボトミーコーポレーションでも出てきたな。

色んな能力があつてめんどくさかつた記憶がある。

「なかなか戻つてこないな」

部屋の中を見回すと、なんだか色々な資料が置いてあつて、読む気にもならない。使い込まれた煙管が机に置いてある。タバコとかそういうの、少し苦手なんだよな。とはいえ、この世界では禁煙なんて考え方もないだろうし。

「なんで私もよばれたんですか?」

「エズラ、お前にはあれがどう見える?」

「どうつて……普通に見えますけど」

「正直な話、私にはあれが男か女か、それどころかまともな輪郭さえわからなかった」

「はい?」

「ねじれているのは確かなはずだが、安定していない。」

色々なものをぐちゃぐちゃに混ぜてみたい気分悪い見た目だ」

「?…よくわからないですけど、記憶を失ったからじゃないんですか?」

「記憶がないからかどうかはわからないが、それなりの規模になりかねないほどかもしれない。私が今まで見たこともないねじれだからな。いや、もしかするとすでに何らかの予兆が起きた後かもしれない。最近起きた事件を調べれば、あるいは何かを起こしているか」

「わかりました、そういうことですな」

「だがまあ、あの様子ならすぐにどうこうというわけでもないだろう。さあ、怪しまれる前に戻るぞ」

「すまない、エズラが転んでこぼしてしまつてね、少し手間取つてしまつた」

「え! 探偵さ…むぐ」

「ありがとうございます」

持つてきてもらったものを飲む。

コーヒーみたいだけど…甘い。

コーヒーはブラックが好きなんだけどなあ、作つてもらつた手前言えない。

「そう言えば名前とか覚えてますか?」

「名前……」

そうか。こつちでは名前、前世のを名乗るわけにはいかないよな。

絶対に合わないし。それになんかこういう時本当の名前を言うと言われるとかしそ
うだし。

「ジエン」

名無しさんです。すこしひねってみただけど、センスは悪くないんじゃないか？

…やっぱりセンスないかもしれない。

「ジエンか、わかった。依頼なら何か手伝ってもいいが」

「いえ、大丈夫です。お金、あんまりないので。」

聞いてみた感じ、俺は20000アンしか持ち合わせがなかった。

アンがこちらの通貨らしいが、多いのか少ないのか。

とりあえず少しだけ過ごすなら困らない程度だろう。

どこかに預けてたとかでもするのだろうか。

正直この世界の記憶なんてないわけだし。

「とりあえず、どうすればここで生きていけますかね」

「らあつー！」

元々持っていた剣は、軽く、それなりに手になじんでいる。

とはいえそれを振るのが俺じゃあ、あまりにもお粗末すぎる。

何度も振るが、簡単に剣をいなされる。

わざわざ刃をつぶした剣を借りたのがばからしいほどだ。

そのうち、疲れてきて少し攻撃のテンポが落ちた。

その瞬間相手の繰り出した槍がこちらの鳩尾を抉る。

石突きだから死なないとはいえ、きつい。

「はあ、ああ……」

えずきそうになってしまい、姿勢が崩れる。

「だめだよ、それは」

目の前まで距離を詰められ、足を引っかけられる。

バランスを崩した俺は背中ですべて重を受けることになった。

「ああ……ゲホ……」

こんなに殴られたりするのが痛いなんて。

腕を切られたときは本気で死ぬ、というか死んだ？けど、

もうそれを味わったら大丈夫かと思っただけど、そんなでもないのか。

「ジエン、立てる？」

倒れこんだ俺のことを上からのぞくのは、俺が入った事務所のフィクサー、ヴェインさん。

生きていくために、俺は自分を鍛えることになった。

モーゼスさんは、自分のために事務所をいくつか教えてくれた。

その中で選んだのは、ハン事務所という所。

他にも色々な事務所があつたが、一人しかフィクサーがないこの事務所を選んだ。

なぜ一人なのにここにしかたか?……ここに泊まれるっていうからさ……住む場所があるのは大事だし。

それに、ヴェインさんはある程度実力者だつて言うし。3級だつて言つてた。

「よろしく、私はヴェイン」

手を差し出してくる。

女性のフィクサーだ。学生服にも似た、というかそのものにしか見えない服装は、

ちよつと体形が良い感じなお姉さんとはミスマッチな感じがする。

「よろしくお願ひします」

そう言つて手を握り返す。

「ところで、なんで一人しかいないんですか?」

そう聞くと、彼女は少し悲しそうにして、「相棒が死んじゃってね」と言葉を落とす。「まあ、よろしくね。私が立派なフィクサーにしてあげるからさ。これから一緒に仕事をやるわけだし」

ニコリとわらうと、机に移動して、立てかけてあった槍を取る。

「じゃ、戦おつか」

「はい?」

それはニコニコとした笑顔で言う言葉ですか?

「剣を持つてるなら戦えるかなって思ってた。実際のどのくらいできるのかも大事でしょ?」

……ということがあつて今に至る。

「まあ、筋は悪くないって感じかな」

そう言つて彼女は槍をクルクルと回す。

「ま、いいよ。少しずつ練習すれば。とりあえず最低限攻撃を防げるようにはなつたしね」

3時間、ぶつ通しだった。とりあえず生き残るために回避と防御をできるようになれつて言われてひたすら攻撃され続けて3時間。

さすがに死ぬ……！

「も、体、が……動かない、です」

「あはは、まあ、そんなもんだよね、最初はみんなそんなもんだから」

結局動けないまま俺はヴィンさんに背負われて事務所に帰ることになった。

俺はソファで寝っ転がる。疲れた。

ヴィンさんはいとうと、あんなに動いたのが嘘みたいになにか書類を書いている。

「とりあえず、あと2日ほど鍛えればとりあえずマシになるかな」

え、二日……？あんな死にけるようなものを……？

困惑が伝わったのか、彼女は少し苦笑いして言う。

「ほら、死ぬのは嫌でしょ？」

「まあ、それは確かに」

死にたいとは思わない。ケガとかしたらすごい痛いわけだし。

「それに、うちは戦闘とかを生業にしている事務所だからね。」

特にここでは私がいるとはいえ、強くないと」

そう言つて、槍を持つ。

「……こんな風に」

なにがこんな風に、と思った時後ろからバリン、という音。

驚いて見れば、ガラスが割れて何人も人が入ってくる。

「殺されちゃうからね」

気を取られてみると、次の瞬間人から槍が生えていた。

「ほいつと」

ヴァインさんはナイフを持って軽く、それこそ雑草を狩るように侵入者の首を切つていく。

よく見れば、ナイフで切りつけつつ、他の人の武器も殴ったり蹴ったりして飛ばしている。

私を守る位置取りで、移動もせずに全滅させてしまった。

「ほら、うちつてたまにこんな風に襲ってくる人がいるからね」

「……ええ」

「少しよごれちゃったね」

そんな風に軽くおどける姿は人を殺した後とは思えないものだった。

「まあ、とりあえず心配しないでね。強い人が弱い人を守るのは当たり前のことだから」

でも、と彼女は続ける。

「できるだけ強くなってくれないと、守り切れないかもしれないからさ、ね？」

こちらを向いて、血まみれの笑顔で笑った。これはスプラッターだ。

「……はい」

というわけで。練習をすることになって。

「そこだよー」

右手に握られた槍の突きを剣で逸らす。突きは向きを変えれば力はそこまでいらない。次の左手に握られたナイフの追撃は少し下がって避ける。

蹴りを入れて牽制、剣を大振りに振ると見せかけて下がる。

槍の横振りを剣で受ける。でも、ヴィンさんは力が強いからまともに受けちゃいけない。

剣を傾けて上に逸らしつつかがむ。

「まあまあ良くなってきたね」

首にナイフを当てられながら言われる。

横振りでかがんだ時にはもう槍を手放していたけれど、かがんでいて回避ができなかった。

「そうですかね」

地味にナイフと槍の組み合わせは難しい。

「じゃあ実践ね、これ」

そう言つて見せてきたのはある依頼の紙。

「ようやくとジエンちゃんのパイクサー認定が下りたので仕事ができるのですよ」

自慢げに見せてきたそれは、ある5級パイクサーの殺害。

はい？

「いやねえ、このパイクサーがねじれちゃったから殺してほしいつて依頼」

「ねじれちゃった？」

「まあ、ようするに化け物退治だよ。うちではそういう類の取返しが見つからない奴らを殺せつていう仕事を処理するの」

「化け物……アブノーマリテイですか？」

「アブノーマリテイ？なにそれ？」

「いえ、なんでも」

「ごまかすように剣をしまう。あたりをみまわして、ふと思う。」

そういうえば、この事務所つて不思議な感じだ。

あんなに攻められるとかいう割には一階が事務室で二階が訓練場なんだな。

「まあともかく、周りとは違って私は弱い皆様の盾なので、

そういうのを駆除してつて頼まれたらきちんと駆除しなきゃいけないんだよ。

まあ、あまり儲からないと言えば儲からないけどね。どちらかと言うと工房の武器の

テストをする依頼で稼いでる感じなんだよね。だから本当はこんな依頼受けるなんて頭おかしいとか言われるんだけど。

……まあ、化け物は皆を殺すから消えた方が良いからね」

最後の表情は見れなかった。声だけでも背筋が一瞬ぞわつときたみたいだった。

「準備できた？」

服は着替えさせられた。ヴァインさんとおそろいの服はこの事務所の制服らしい。

学生服っぽくて絶妙にかっこ悪い。これで戦うのか？

「なんか嫌そうにしてるけど、一応効果はそれなりにあるからね？」

「そうなんですか……」

なら仕方ない。我慢しよう。

場所は裏路地。

汚い、というかもはや廃墟にしか見えない建物。

「いた」

ヴァインが指し示した先にいたのは、たしかに化け物だ。

なんというか、クトゥルフあたりにも出てきそうな見た目をしている。

頭が大きな肉の風船で、そこから翼が生えている。顔が大きく広がって歪んでいるのは軽くホラーだ。

皮膚が裂けて肉が見えてるし、血も流れている。そんなそいつはというと、翼をはためかせ浮いている。体がぶら下がって揺れていてストラップかなにかのようだ。

こちらには気付いていない様子だ。

「気持ち悪い」

正直、ねじれた化け物がこんなものだとは思っていなかった。

いや、アブノーマリテイみたいなものだろう、これ。

こんな武器で倒せるのか？

自分の剣を見る。悪い武器ではないとは教えてくれたけど…。

E・G・Oが欲しい。ダ・カーポとか、とにかく強い武器。

「アレを倒すんだよ」

「……目が痛いですね、まずいんじゃない……」

よく見ていると……さつきから頭が痛い。

我慢が出来なくなってきたか？

「大丈夫!？」

大丈夫だったらかがみこまないから。

がながん頭が叩かれてる。うるさい音だ。

なんなんだ……

システム初期化……

今の私と同じ化け物……

悪い化け物、人を殺す化け物……

女の声が聞こえる。あの時と同じだ。

エネルギー伝達の促進……

私はあれがいやだ。

それは罰を与えないといけない……

あれが嫌って、なんなんだよ……

あれは悪いものだから、滅ぼして。

何かが流れ込んできて、流れ込んでくるそれが自分の中の何かを削り取っていく。

…そうだ、受け入れられない。あんなものが存在していいわけがないだろう。

「悪人は滅ぼささいといけない」

俺は手にもつ白と赤の意匠の銃、『くちばし』を構える。

容赦なく引き金を引く。

銃声が響くたび、肉風船に穴が開く。中身すら肉で出来ているようで、なかなか落ちる様子がない。

引き金を引いて、何度も弾が飛ぶたび、化け物の肉が弾け、抉れ、翼がもげる。

そうして動きが無くなったのを確認すると、念のためにもう一発弾丸を首に一発。

「……私が言うのもなんだけど、ジエンちゃん容赦ないね」

ヴィンさんの視線は俺の銃に向いている。

「というかそんな銃持ってたんだ」

「……」

『くちばし』が光の粒のようにほどけて消える。

「なにそれ、もしかしてなんかすごい銃だったりするの」

俺は自分の手を見る。なんだろう、今のは。間違はなく罰鳥のE・G・Oだった。

女の声が聞こえて、何も聞こえなくなったと思ったら、次に音が戻った時には自分の手に銃があった。

まあ、考えてもわからないか。

「終わりましたね」

「……私、今すぐく返事に困ってる」

「とりあえず依頼はこれでいいんですよね」

「…まあ、うん」

「はい、これ」

事務所に戻ってしばらくして書類が書き終わった彼女から渡されたのは一枚のチケット。使用済みのようだ。

「これって」

「記憶がないって言ってたでしょ、服を洗った時に出てきたんだよね」

ワープ列車のチケットと書いてある。

行先は9区のようだ。

「もしかしたら記憶が戻るかもしれないでしょ？」

「でも、お金がないんですけど」

「そこはほら、仕事をすればいいから。良くも悪くもうちの色んな仕事が入るから」

「そうですね」

「明後日は大変な仕事だよ？なにせ一つ事務所を潰すわけだから」

「はい？」

「だから事務所を潰すから」

「…そうじゃなくて、そんな依頼が？」

「まあ、弱い人達から搾取するような事務所だからね。それにもうそろそろこの槍のテ
ストも本格的にやらないといけなかったし」

「どうやら次は事務所を潰しに行くらしい。」

「……無理じゃね？」

「そんな顔しないでよ。ジエンちゃんもそこそこ身体強化してるみたいだし大丈夫で
しょ」

「もしかしたら入る事務所を間違えたかもしれない。」

「こんなことしてたら死んじやいそうさ。」

「大丈夫、ぜったい守るからさ。」

「頼もしく、悪意の全くない笑顔が断る気力を削る。」

「次の依頼は、事務所潰し。」

「うわあ、いやだなあ。……人殺しかあ。」

こんにちはは、管理人

「それで、依頼ってなんですか？」

「えっとねえ、嫌な事務所があるから潰して欲しいって依頼」

嫌など言った事務所。

依頼によるとぼったくりをされた上に裏切られたというらしい。

依頼人に会いに行く。裏路地にある家のようなものの中にいる。

「はい、私だよ」

「ああ、あなたが依頼を受けてくださった……ありがとうございます」

なんというか、やせ細っている彼女と、その子供。

お母さんは体を震わせながら、涙を落として感謝してくる。

「いやいや」

「主人と子供の仇を、お願いします」

そうして語り始めたのは、この界限ではよくあるという搾取の関係。

元々双子だったらしいが、片方は拉致されて売り飛ばされてしまったらしい。

主人はその事務所に子供を助けてほしいと頼んだ。

そうして金を受け取った彼らは、確かに探し出した。

主人がうちの子はまだ生きていると喜んでいたのでから間違いないと。

そしてそこからさらに助けて欲しいと頼んだ時のことだ。

巢の中までいかないといけないから追加料金だと言われ、結局払って、払って、それでもしがみついた彼は最後に、

というわけだ。

まあ、後味の悪い話だ。

それでどうとうお金が無くなった彼女はうちを頼ってきた、と言うこと。

「必ず復讐を果たすからさ」

そう言つてヴェインさんは立ち上がる。

「さ、行くっか」

振るわれた生体武器を避ける。

生体武器は直接体についている武器で、それこそ体のように動かせるらしく動きが読めなくてやりづらい。

今、俺たちはちようど事務所潰しの真つ最中だった。

剣を振るう。この体に施された身体強化はそれなりに良いものらしく、

下級のフィクサーなら技術もあわせて

そこそこ対等に渡り合える程度には強い。

現に今振るった剣は相手の持つている武器を弾き飛ばして、天井に突き刺さってしまった。

とはいえ、こんなに一对一の状況で戦えているのは当然ヴァインさんのおかげだ。

私が攻撃を四、五回しのぐ間に一人倒すぐらいの差。

「銃があれば……」

そうぼやいても意味はない。

あの時に消えてしまったE・G・Oはまた現れることはなく。

少し期待していた自分を鮮やかに裏切り、俺は近接でこのフィクサーを相手にすることになっていた。

腕から伸びてくる刃を叩いて弾く。伸びるのかよ、と内心突っ込むが、本当に余裕がない。

かわすのはけっこう上手になってきたとは思うんだけどね…。

攻めようとするのとたんに余裕が無くなる。

防御の練習はできているけど、攻める練習ができていないからだ。

結局、ヴァインさんが背後から一突きして戦いが終わるといふ結果になってしまった。

死体を片付けて、売れそうなものを選別していく。
依頼料自体がないようなもので、こういう死体漁りもしないといけないのだとか。

武器とかを売るのもうちの収入の一部だということ。

悪人のだから良いって言ってたけど、俺は少しためらつてしまふ。

作業の途中、ヴァインさんは私の戦闘についてのアドバイスを始める。

あそこは良かったね、とかそこは気を付けて、とか。

戦闘しながらこつちをちゃんと見えてるのは明らかにおかしくありませんか。

「危ないなら銃を使えば良かったのに」

そうヴァインさんは言うけど、出せないものは出ないのだ。

「武器に出るとか出ないとかあるの?」

「いや、まあ。よくわからないんですけど」

「じゃあ、私の武器の手入れついでに工房に行こうか」

「工房って、あの?」

たしかヴァインさんが武器のテスターをやってるっていう……。

「そうそう」

とりあえず武器を次元バッグに一通りしまい終えたあとは、資料を片付けていく。

「……ああ、これか」

急にヴァインさんが不機嫌そうな声になる。

そう言つて見せてきたのは一枚の資料。

依頼人の名前も聞いた名前と一致するが、一つ違う所は、子供の安否。

すでに死んでいる。そのことが資料に書いてあった。

つまり依頼を受けて、さらに搾取したあとどちらにせよ殺すつもりだったのだろう。

なんというか、救われない話だ。

「……これは、言うべきなんですかね」

「言うべきだよ」

そう彼女は言い切る。

「きつとあの人は少しでも生きてる可能性があつたら全部をかけちゃうからね」

「そうですか……」

悲しい話だけど、お金があればちゃんとした所に頼めたんだろうな、とか思うところもある。

「まあ、それが都市だからね、良くも悪くも皆お金で動くから」

「でもヴィンさんは違うじゃないですか」

「まあ、強い人が弱い人を守るっていうのは当たり前のことだからね」

「じゃあ、私は依頼人の所に行くから先に帰ってて」

そう言つて一人になつた帰り路。適当な店でケランチムとかいう料理を買つて持ち帰れ。

そう言われて色々な店を回っているけれど、よくわからなくなつてそのうちに道に迷つてしまった。

「どっだよ」

変に入り組んだ道だな。

頭痛もするし、まるであの時みたいなの……あの時、みたいなの？

「っー」

直感に従う。

背中の剣を使つて背後からの攻撃を防ぐ。

そのまま転がりつつ態勢を整えて、相手を見る。

包丁を持ったシェフがこちらを見ていた。

予想外の相手の登場に、固まつてしまふが、次の言葉はその驚きをさらに上回るもの

だった。

「お前、最高の材料になるな」

「は？」

材料？何を言ってるんだ、こいつ。

「他のやつらとは違う、違う、違う、絶対逃がすなって言ってるんだよ、絶対、絶対、ぜったあい」

こいつが言ってることはよくわからないけれど、嫌な予感がする。

目の前のシェフは、大きくなっていく。腕が増えていく。

なんだよ、……くそ、頭が。

ねじれてやつか……それに反応しているのか？

「でも頭が痛いのはやめろっての！」

集中できない。

剣で腕を切り飛ばす。包丁を持っている腕だから、これでもう武器が……っ！

驚いて余裕が消えたのは、その直後。

3メートル以上も飛んで見せたそいつは自分の腕と包丁をつかんで落ちてくる。

とつさに包丁の振り下ろし避けるも、腕の一本に捕まれ、俺は壁にたたきつけられてしまう。

なんとか頭が直接たたきつけられるのは防げたけど、きつい……！
体が痛い。包丁が振り下ろされる。

受け入れて、醜い私を

うるさいけど、これでなんとかなるのかよ？

分かった、受け入れるから。

その返事に呼応して、体が作り変えられていく。

水晶に変わった左腕は、振り下ろしてきた包丁をその硬さで簡単に受け止める。

どころか、そのまま包丁を握り潰すことさえできてしまった。

(受け入れて、もっと)

もういいよ、勝てるはず。

左手でつかんできた腕を握り潰す。

そのまま立ち上がって顔を殴る。

よろめいたところを殴る。

そうして剣を拾う。さつき叩かれたときに落としてしまったものだ。

水晶に変わった左腕は力強く、今までとは比にならない勢いで剣を振るう。

腕を落とし、体を刻んでいく。足を切って、首を落とす。

息を整えると、ねぎらいの言葉が。

(おつかれ)

「……助かった。ところで誰？」

(体の持ち主、だったはず)

「は？って何だよ」

(記憶がない)

「そうか。それでこの力は？」

(あれと同じ)

「あれって、さっきのねじれってやつ？」

(そう)

「じゃあ、この力って使うとあんなやばい感じになるのか？」

(ならない)

「なんでだ」

(あなたは私じゃないから)

「はあ、よくわからないな」

(ところで、お願い)

「はい？」

(私の記憶を取り戻して欲しい)

「なんでだよ」

(元々私の体だから)

……それは、ちよつと断れないな。

帰つたらなんでケランチム買つてくれなかったの、とぼやかれた。

それはそれとしての悩み事。

とりあえず、これはどうするべきか。

左腕はしばらく見せない方が良さそうだ。

一応包帯をすれば隠せるし。

それからあの女の声も聞こえなくなつたし。

これからどうしようかな。

「明日は工房に行くからね」

そういうことじゃない。とは口にはしないでおく。

というか、眠い。少し寝るか。

……眩しさに、目を開ける。青空が見える。

芝の上で寝ていた覚えはないんだけどな。

そんな風に思っていると、一人の男が近づいてくる。

その姿に驚きを隠せず、とっさに立ち上がる。

目の前にいるのは、あのロボトミーコーポレーションでみた男。管理人と呼ばれる人。

白衣を着ている黒髪の男。最後に出会う男。

そんな彼は、するどい視線でこちらを見る。ややあつて口を開く。

「こんにちは、X」

そんな風はこちらに対して挨拶をしてくる。

不機嫌そうにも見える顔は、とてもそんな言葉を吐くようには見えない。

それに、第一の話が。

「いや、Xはそつちじゃないですか」

そう言うのと、少し唇を歪める。

笑っているのだと理解するのに少し時間がかかった。

「正確には間違いではない。僕は君の想像した僕にすぎない」

彼はそう言った。

つまり、本物ではないということか。

「それで、なんですか？（こ）は」

周りはひどく明るく、果てが見えない。その上なぜか体も元の男の時に戻っている。

「君は、君が入っている体の中の種を芽吹かせた。それによって光の力が君に及んだ」
「どういうことですか」

「まあ、夢をみているようなものだ」

「それで、なんでこんな夢にあなたが出るんですか」

「君がE・G・Oという力を望んだからだよ」

よくわからないので、説明を待つことにする。

「光には僕の欠片が溶け込んでいる」

「僕はあの場所得たアブノーマリテイのデータを内包しているようなものだ」

「君の持つ記憶がそのデータを刺激し、E・G・O、そして僕という虚像を作り上げた」

つまり、なんだかんだ僕が原因だと。だとしても、だ。

「だからってそれを言いに来た理由ってなんですか」

夢にまで出てきた理由って。

「……君はE・G・Oが何によってできているのか知っているはずだ」

「だから、一つ言うべきことがある」

「芽吹いた種が完全に育てば、恐らく君は消えるだろう」

「なぜならば、その芽吹いた『可能性』は元々君の物ではないからだ」

「そして君は君自身のE・G・Oを発現する資格を持っていない」

「だから彼女は必ず君の精神を殺すことになる」

そういうと彼は目を閉じる。

「僕は、……いや、君に対しては言う必要もないか」

そうしてこちらを見る。それは優しい目だった。

「この都市の者ではない君がどんな選択をするのか——

光が彼を包む。そうして消えていく。

「……そうか」

俺は、これからどうするべきか。

俺の精神を浸食できないのは、きっと彼女が記憶を取り戻していないからだ。

記憶を取り戻せば、俺は死ぬ。

でも、この体は元々彼女の物だ。

だとすれば、俺はいつたいどうするべきか。

そんな今、俺は気楽工房という場所につれてこられていた。

ヴァインさんがテスターを引き受けている工房。

「まあ、なんであれ強くならないといけない」

死んでしまつては元も子もないのだから。

悩みは絶えない。それでも、時間は過ぎていく。

でも一つだけ決まっていることがある。

なんであれ俺は彼女以外に殺されることだけは許されないのだ。

自分を消していく、そうですか

「すまんすまん」

工房にて。

そうやって笑顔で入ってきたのは、金髪のヤンキー風の男。
やたらと大きいケースを持っている。

からつとした笑みがまぶしい。明るそうな印象は、多分悪いようにとられることはないだろう。

こんな状況でなければ。

「こら、ちよつと？ジエンちゃん？」

ヴァインさんが苦笑いしながらもなだめようとしてくる。

「こいつ、殴って良いですか」

俺はこの男に対して腹パンを入れ、事後承諾と言う形で許可を取る。

「いやあ。……けほつ、……なんて暴力的な女の子なんだ……」

効いていないようなのでもう一発。

「待っあ」

せき込んでうずくまる男に対して、俺は心の中にたまっていた怒りを吐き出した。

「予定の時間がいつだったかわかります？二時間前？おかしくないか？こつちは二時間前にすぐお茶持つてくるからって言われた気がするんですけど、二時間かかってお茶も持つてきてないってどういうことだよ!?!わけわからん！」

「……あのさ、ジエン」

ヴァインさんに肩を叩かれる。怒りすぎ、と小声で言うが、知ったことではない。

「そうだぞ、俺は悪くないからな」

そんな小さな声すら聞き逃さずさかさず便乗。爽やかに笑うその顔。

拳に力が入ってすべってしまいそうだなあ。

「ジエン。……腕は良いの、腕は。まあ、こんな感じだから客は全然いないけど」

「ボミヨンだ。よろしく」

そう言つてボミヨンは殴りかかってくる。

意外にも速い拳に反応しきれず、衝撃を覚悟するが、寸前でヴァインさんがその拳を止めていた。

「ヴァイン、止めんなよ」

隠し切れない不満が見える。不満ですと顔にでかでかと書かれるだろう。

「殴られたのはしかたないじゃない？」

そう言うと、ボミヨンの手を離す。

相当強い力でつかんでいたようで、少し赤くなっている。

「二発は多いだろ、お返しだよ、お返し」

「ボミヨンとジエンちゃんの一発は違うの」

「たとえば客が入るとするだろ？その時に新しいアイデアが思いついたとするだろ？だから俺はアイデアを優先した……つとそうだそうだ」

彼はいつの間にか俺の後ろに回って剣を見ていた。

「少なくともこの辺の武器ではないなあ……工房もどこの奴かわからない、手入れがちゃんとしてあるから現役だが、かなりの年代ものだな、マイナーなやつか？」

「ボミヨン」

ヴィンさんが促すと、あ、とボミヨンが大きなケースを開く。

「あー、えつとジエンだっけ？お前の武器はこれだ」

一振りの剣。持ってみると、なかなか軽い。

「すごいだろ？めちやくちや頑張って軽量化してみたんだよ」

今の武器は預かってくれるらしく、この武器をありがたく使わせてもらうことにした。

「ところであの時の銃は？」

あー、それは。

「大事なもののなので」

ごまかしておこう。E. G. OはL社の技術のはずだ。外に漏れているとかばれたらまずい気がする。

それに、あの後消えちゃったから、どうすれば出せるのかもわからない。

「ねじれ?」

「そうそう、なんか色々あるみたい」

彼女が仕事の書類をパラパラとめくる。全部目を通さなきゃいけないな、とかぼやいている。

一種の小論文にも思える枚数を読むのは確かに大変そうだ。

「そんなにもらつても読むのが大変ですよね」

そんな言葉に、ヴィンさんはフフ、と笑ってこちらに指をさす。

「情報が無い方がもつと大変だよ?」

新しい剣はなかなか扱いやすく、良い感じになじんできた。

戦う依頼だつて、きつと問題なくこなせるはずだ。

「不思議だねー、最近までは全然こんな依頼なかったのに、急に増えた気がするよ」

そう愚痴りながらも、笑顔は崩さない。この人が怒るところとか想像できないな。
「行きますか」

そう言つて書類を雑に投げると、だらけていたせいで乱れた服を整え、槍を手取る。

裏路地にある建物の中にいるというねじれ。

中に入ると、赤を基調とした部屋が俺たちを迎える。

「お客様ですか」

声が聞こえる。

目の前の巨大な糸車には、人が刺さっている。

人が解かれ、糸が紡がれている。

椅子に座っているのは、糸で出来た人形。いや、糸の塊が人の形をとっているようなもの。

ただし、頭は半分しか作られていないが。

クルクルクルクルと作業の手を止めることはない。

「話を通じるみたいだね」

「二名様ご案内ですね、どうぞ」

こちらを向くこともなく、手で示した先にはテーブルがある。

「遠慮しておくよ」

ヴァインさんは槍を構える。

「例えば、自分は糸の集まりだと考えたことは？」

糸車を回すと、人が解けていき、糸が変わっていく。

「少し話を聞いていただきたいですから、武器などというものは収めていただけると」

「どうしますか？」

「もちろんお断り！」

糸を切り裂く。切り裂いた断面から何かガスのようなものが空気に漏れ出る。

「時間は過去から今へと繋がる一本の道」

「黙って」

ヴァインさんの槍は、糸が降ってきて槍を絡めとろうとしたことでねじれを扶えることはなく。

壁から赤が剥がれ、それが解けて糸になっていく。

そうして糸は人の形や、犬のような形、生き物の形に。

剣で糸の塊を切り裂いていく。

彼は、顔を手で多い、空を仰ぐ。

「まるで糸のようだとは思いませんか？」

恍惚とした声が部屋を満たす。

「もし、人を糸にできたなら、それはそれは美しいものでしょう」

「苦勞の色も、歡喜の色も、同じ色など一つとしてない」

「私には、赤にしが見えないけど？」

ヴィンさんの言う通り、赤い糸しかなかった。

「それは、あなたの心が感じることでできなくなっているのですよ」

糸を防ぐ、切る。

きりが無い。ふと、チクリと足に痛みを感じると、小さな小さな針が刺さっていた。

とたんに頭のなかでからから、からから、と音が聞こえる。

「ジエンちゃん！」

転ぶ。片足が糸に変えられている。

「その糸はあなたの過去であり、あなたの在り方であり、あなた自身なのです」

ああ。糸の断面からあふれているのは、何かの光景。

過去というものなのだろう。

糸は赤く見えて、赤ではない。ほんの繊細な色彩を放っている。

まずい、まずい、まずいまずいまずいまずい。

「あのですね、仕立て屋さん」

なんだよ、大事な話って

「私は昔とても悪いことをしてしまったのですよ」

はあ、それで？別にだからなんだって話なんだよ

「あなたの妻を殺したのは私なんです」

は？……今、なんて言った？

「ええ、そう怒らずに、落ち着いて」

くそ、くそ、っ！……ぐあああつ！

「あまり手荒にはしたくないのですよ、とまあ、これで話をきいてくれますね？」

くそ、手が、クソ！

「もう手を使うこともないのですしいでしょう？」

……ミナを返せ！この悪魔が！ずっとそばで見えて楽しかったかよ……！

「人をいたぶるのが好きな性分でして」

……っ

「ミナの最後の言葉を聞きたいですか？」

「まあ、教えませんけどね」

痛みと、怒りが体の中で駆け巡った。

奴の腕だった糸の塊から、ミナの色の糸を切っていく。

その糸のなかには記憶があった。

ミナを殺す記憶。

糸に頼ずりをする。

「ミナ、ミナ、ミナ……」

ミナの糸の断面から、記憶が流れ込んできて。

ミナの最期の言葉が聞こえる。

「愛してる」

その一言が、糸の中にあつた。

聞き続けて、聞き続けて。

足りなくなつた。

次は友達からミナを切り取って束ねた。

奴の手がかりは見つからない。

友達から。友達から。友達から。

ミナの糸を切り取って束ねた。

奴の手がかりは見つからない。

でも、見つからないこともあった。

どうすればいい。どうすればいい。

どうすればいい。そうだ。

自分からミナの糸を切り抜けばずっと幸せな過去を繰り返せる。

自分から■の糸を切り取って束ねた。

それで、あたりを見回すと、様々な糸が地面に散らばっている。

どうしてこんなに美しい糸を使わないのか。

なんて、人の過去は美しい色をしているのだろうか。

■の糸が束ねたソレを置いて、ひとまず糸の片付けをしよう。

ガラリとドアを開ける音がする。

「いらっしやいませ」

目の前の男は、動揺してこちらの名前を呼ぶ。

顔がきれいだが、糸にするとどうなのだろうか。

どんな色なのだろうか。どんな過去なのだろうか。

尽きない興味に突き動かされ、糸車を回す。

「はあ、はあ、今のは」

記憶だった。多分この人の記憶。

「どうやら、君の精神は解かれなかったらしい」

管理人の声が聞こえる。

「君の精神がこの世界に定着しきっていないことが予期しない結果をもたらしたよう
だ」

「これ、どうするんだよ」

「左手を見るといい」

包帯が外れていて、水晶のような腕が見える。

「彼女のE・G・Oが弱いのは彼女に何も無いからだ」

「だからなんなんだよ」

「彼女に自分自身をゆだねればいい」

「そうすればどうにかなるのか?」

「もしかしたら、の話だ」

「……」

「怖いのか?」

「……怖い」

「怖くなった時にするおまじないがあるだろう」

目を閉じる。

体から力を抜く。

浮遊感が体を包み、地面があやふやになっていく。

「自分を消していく、だよな」

返事はない。

左手をつかまれて、上に引かれていく感覚。

海の底から浮き上がっていくような。

——彼の手を引く。

私には何も残っていない。

だから彼の心を借りる。

上着のように。何もなくて寂しくて寒くなった心を温かくするために。

私は彼の心の殻を着る。

その瞬間、あらゆる何かと繋がった気がした。

それはとても暖かくて、穏やかな気分になる。

でも、何かがなんなのかはわからない。

ただ時が過ぎて。

この心地よい無感覚に溶け込もうとした。

——ある瞬間温かくなった。

目の前には灰でできた少女がいる。

体をマツチ棒が貫通している。

心に打ち込まれたマツチの火は絶対に消えない

今まで燃えなかったマツチの火がようやく燃える、灰になる。

おそらくあの煌々と輝く火は、私の体に飲み込んだことに対する対価だ。

私が燃えたら走ろう。

今までずっと苦しかった、これからもずっと苦しいのだろう。

なのに、なぜあなたはまだ幸せなの？

私は自分が脅威になったことを知っている。

何も変わらなければ、あなたが苦しんでいるのを見たい。

来て、と彼女は言った。

「ここにいれば、私は何も取り戻さなくても良いと思った。」

「でも苦しんででも、私自身を取り戻すべきなのかもしれない」

手を掴む。

無感覚になっていった体に熱さが伝わり、自分自身があつたのだと自覚する。

「ありがとう、行くよ」

そう返事すると、マッチの火が揺らめいた。

目覚める。

糸にされかけたけど、戻ってきた。

手には大砲、『四本目のマッチの火』があつた。

服もご丁寧にE・G・Oになっている。

「存分に使わせてもらうからね。…ヴェインさん、部屋を出て！」

糸がヴェインさんを追っていくが、剣で切り落とす。

そうして、バズーカを構える。

引き金を引く。

バズーカから噴き出た弾は、爆発し、糸を燃やしていく。

一撃の威力はTETHでもかなり強いという数値に違わず、一撃で部屋全体を燃やしていく。

「ああ、だめだ、燃やすな、私の……」

燃えかけているねじれ。彼は手を伸ばし、燃え尽きていく糸たちをつかもうとする。

私は、その糸の中から、強く記憶の中に残っている糸の束を手に取り、その糸をねじれの糸に結び付けた。

「……ああ、ああ……そうだ。■、■、……ミナ」

「気分はどうですか？」

「最悪だ、……最悪だよ」

「望み通り、ミナと一緒にですよ」

「……いや、違うな。これは、ミナじゃない」

「どうしてですか？」

「ミナは死んだんだ。もう戻っては来ない」

「そうですか」

「この糸を持って行ってくれないか」

「なぜですか？」

「覚えていて欲しい」

そして、復讐を果たしてくれ。

外に出ると、ヴァインさんが抱きついてくる。

胸が大きいから少し息苦しい。

やがてしばらくするまで抱き着かれたままだった。

「ジエンちゃん!?!」

「ヴィンさん。大丈夫ですか?」

「ジエンちゃんの方が心配だよ!?!」

「私は特にケガはないです」

「そっかあ…良かった。それより、さっきのはなんだったの?」

もう今はE・G・Oを着ていない。倒してから消した。

左腕を見る。とりあえず普通の腕に戻ったし、隠す必要はなくなったかな。

「なんでもないです、ただの友達からの貰い物ですから」

「可愛いけど…本当に大丈夫、それ?何か起きたりしない?」

「大丈夫ですよ」

糸を編んで作った布のチョーカーを付ける。

ボミヨンに糸で何か作ってくれて頼んだら呆れられてしまった。

職人に糸を使えって何がしたいんだよ、と。

ともかくミナの糸の強度は相当らしいから、首を守るのにも役立つはずだ。

……それにしても、自分を消していく、ね。

何か取返しのないことをしてしまった気もする。

とりあえず、考えるのはやめよう。

廃墟。血まみれの男。いや、血に濡れているのは服で、特に傷があるわけではないよ

うだ。その目の前には全身を隠し地肌が全く見えない、仮面をつけている者。

とはいえ、ここでは正体がわからないなんてことは珍しいことではないが。

……そして、男が跪いている。

顔は涙で濡れている。歡喜の笑みが絶えることはない。

『私にこの地に在れというのであれば』

『あなたのあらゆる病を治し、あなたを治療しましょう』

手を差し伸べる人物は、顔を見せることはなく、表情は窺うことは叶わない。

だが、その声はひどく優しく、男にとってまさしく福音に違わぬものだった。

男は世界を救いたいと願う。この者と正しい世界を創造したいと願う。